

少年期の対人関係の問題について

——特に「いじめ」との関連から——

高 石 浩 一

On the Problem of Interpersonal Relation in the Childhood

——From the Viewpoint of “Ijime”——

TAKAISHI Kouichi

いわゆる「いじめ」現象は、それが後の人格発達に大きな影響を及ぼすものであるにもかかわらず、従来臨床心理学の分野では比較的扱われることが少なかった問題である。これには様々な原因が考えられるが、まず第一にこれが発達心理学、教育心理学、社会心理学といった心理学の諸領域に加えて、教育学、社会学、更には法律学まで含めた諸領域にまたがる学際的な問題であることがあげられよう。また、個人の人格変容や自己実現を課題として、もっぱら家族内力動や精神内界の力動に焦点付ける、臨床心理学の特殊性にも由来すると考えられる。しかしいわゆる「いじめられっ子」が臨床の現場にも出現してくるに及んで、この問題を新たに臨床心理学的な立場から検討していく必要性が高まってきたように思われる。そこでここでは、これまでの研究を踏まえた上で、いじめを臨床心理学的にどのように位置付けていくべきかについて考察してみたい。

<少年期について>

いじめは小学校3、4年時より始まり小学校6年をピークにして中学校2年以降激減する、ある意味で極めて年代特定的な現象である。しかし、その定義が曖昧であるために、既に小学校1年時よりいじめはあるとする報告や、高校3年まで及ぶという新聞報道もあり、この幅広い年代を従来の心理学用語で代表させるのは極めて困難である。先の年代だけに関して言えば、おそらくギャング・エイジと総称するのがもっとも適切であろう。これは9～13歳位とされ、自立への足掛かりとして同性小集団で冒険やゲームを楽しむ時期である。深谷（1986）等はいじめがこの年代に特有の心性、例えば「排除」の論理をもって集団凝集性を高めようとしていることとの関連を重視している。また児童期、あるいは学童期という用語は6～12、3歳とされ若干幅広い時期を指してはいるが、自殺や障害、殺人事件を引き起こし、いじめを社会問題にまでした高校生の時期を含めるには至らない。

そこで本論文においては、いささか曖昧な概念ではあるが、このいじめの生起する年代を「少年期」という言葉で代表させてみたい。これは例えば児童福祉法では6歳から18歳を指すが、山中（1978）はこれをほぼ6歳から15歳として考えている（但し彼は別の論文でこれを思春期と区別し、「就学時から第二次性徴の発来まで」と定義し直している：山中・森；1980）。これは単にいじめを論じるに当たって、この少年期がもっとも適当な区分であるという理由によるのではな

い。むしろ重視したいのは、彼が少年期と命名することで、臨床心理学の分野ではこれまでやや軽視されてきたこの時期を、新たに見直そうとしていることである。確かに彼が述べるように、神経症や精神病などの発症に先立ち比較的平穩であるとされるこの時期は、「それを胚胎し準備する」時期でもあると考えられるのである（筆者が調査した相談室インタビュー時の資料でも、何らかの友人関係の問題を示唆する事例は25パーセントを越えている）。

ところでこの少年期は、いったいどのような特徴を備えているのであろうか。

精神分析の創始者である S.Freud はほぼこの時期にあたる年代を「潜在期」、あるいは「潜伏期」(latency period) と呼んだ。Laplanche, J. & Pontalis, J.-B. (1976) によれば、これは「小児性欲の衰退期（5, 6歳）から思春期の開始期にいたるまでの期間で、性欲の発達停止期にあたる。この期間には、対象関係と感情の非性化（とくにやさしきの性欲にたいする優勢）、羞恥や嫌悪のような感情の出現、道徳的および芸術的関心の出現に見られるような性活動の低下が観察される」としている。Blos, P.(1962) はこの時期の精神分析的な意味付けを行い、①親からの自立に伴う感情と気分の安定、②葛藤外自我領域における知覚、学習、記憶、思考等の能力の強化、③身体的表現に代わる言語表現能力の増大、④合理的思考と空想の分離や公的世界と私的世界の行動の分離による標準的社会的慣例の獲得、等を指摘すると共に、「前思春期」、「思春期前期」といった新たな段階を提唱した。「前思春期」では本能的衝動の増大に伴い、強迫的防衛が再び用いられる（収集癖等に見られる）。また罪悪感も強まるので、それを共有する集団を作ろうとする（ギャング集団はこう意味付けられる）。但し女子の場合はこれとは異なり、「一時的に母親の能動的男根イメージに同一化」する（「お転婆」になったり「男まさり」になる）。「思春期前期」では男子の場合、「友人」を理想化し同性愛的傾向を強化することで衝動を押しえようとするが、一方女子の場合、両性的対象に「夢中」になる（アイドルへの熱狂等に見られる）。また Erikson, E. H. (1959) はやはり潜在期を重視し、これを「勤勉さー劣等感」の対立図式の中で捉えた（発達的には6～12歳にあたる）。この時期には、学んだり働いたりする人との同一化により、知識を増大したい、技術を身に付けたいといった欲求が強まり有能感(competence)を獲得していくが、他方集団から孤立した子供はそのような同一化ができず、劣等感を持って無為な状態に陥ってしまう、としている。

このような精神分析的な（もっぱら自我心理学的な）見解は、この時期の障害をより以前の母子関係やエディプス関係（父母＝子の三者関係）における葛藤解決様式への固着あるいは退行と捉えており、その意味で後に述べる一元過程モデルに沿った見方であると言えよう。

ところでこういった「少年期」の位置付けに加えて、特に重視しておきたいのは Sullivan, H. S. (1953) の見解である。筆者が彼を重視するのは次の二つの理由による。

- ①自らの発達論を展開する中で「少年期」(juvenile era) を明確に位置付けた。
- ②「いじめっ子」(bully) や「いじめ」に相当する「仲間外れ」(ostracism) について言及している。

彼は「少年期」を「小学校入学から親友(chum)を見つけるまで」と規定し、「少年期に泥沼にはまってしまった人々は、仲間達と快適な生活をする上で決定的な欠格者となってしまう」と述べている。また少年期までに非常にまずいパターンを身につけてしまった子供達は、少年期に大きな変化を見せないと、「大きくなるにつれて、どのような集団にとっても受け入れ難い異分

子になってしまう」とも述べている。ここでその変化をもたらすものは学校である。彼によればこの変化は「社会的従属」と「社会的調節」によって生起する。「社会的従属」を準備するものは、両親に代わる新しい権威者（教師等）の出現であり、また悪意を持つ少年（いじめっ子；bully）の出現である。こういった人々は折りに触れ破壊的な権力や暴力を行使するが、子供はそういう経験を通じて困難に対処する仕方を見出し、生活する能力を増大させていくのである。他方「社会的調節」を準備するのは同年齢の様々な子供達との接触である。こうして少年期に権威者であった両親の地位は相対的に低下し、従ってそれまでは「正しい行為」とされていたものも変容せざるを得なくなる。これは必然的に不安を喚起し、これに対処するために「自己組織」（self-system）は選択的不注意（selective inattention）という「安心操作」（security operation）を用いる。この結果、一方で不安を喚起するような余計なものに悩まされずにすむが、他方で本当に重要なものまで排斥してしまい、本来そこから得られるはずの安心を手に入れることができなくなってしまう、と結論している。

ここで彼は、いわゆる「仲間外れ」について述べている。彼はこれを「少年期が設けた社会病理の反映」と定義し、その原因を家族背景、能力、成熟の速さ、健康さ等の違いにあるとしている。しかし仲間外れをされる理由は、往々にして本人には謎に包まれたまま（mysterious）である。その結果、この時期に仲間外れにされた子供は、良い自尊心を獲得できないという大きな影響を被ることになる、としている。

次に引き続く「前青年期」の最大の特徴を彼は「親友」（chum）との協力（collaboration）にある、としている。つまり読書や旅行等を共に体験する同性の一人の親友との関係を通じて、「精神的視野の拡大」と「多くの人や物や人間関係よりなる世界への共感的態度」が形成される、としているのである。（中井；1986は Sullivan の発達論自体、彼自身の体験に基づくものである可能性を示唆している。しかし中井本人も述べているように、前青年期に関する彼の見解の治療的意味は極めて高い。この点については後述したい）。

<仲間関係について>

これら一連の研究や考察は、少年期における「仲間関係」という対人関係の重要性を示唆しており、いじめも必然的に「仲間関係」における障害として理解される。そこで以下にいじめ現象と関連させながら、この時期の仲間関係に関する研究を概観していきたい。

Renshaw, P. D. (1981) によれば、子供の仲間関係や友情について、観察法、ソシオメトリー、実験的介入といった研究法が確立されたのは1930年代であったという。中でも Moreno, J. L. とその学派によって体系付けられたソシオメトリーは後に大きな影響を与えたとされている。いじめとの関連で注目しておきたいのは、彼が言及している Northway, M. L. の報告である。Northway は成績の悪い、心理的にも身体的にも活動性の低い子供（劣等児；recessive child）と、騒々しく反抗的で横柄な子供（社会的能力に欠ける子供；socially ineffective child）、社会的に無関心な子供（socially uninterested child）を区別し、各々の子供に異なるタイプの援助が必要であることを示唆した。この流れは後に述べる、social skill（社交術、処世術と訳せるかも知れない）の未熟な者としての、いじめられっ子観へと発展する。

一方 Rangell, L. (1963) は友人関係（friendship）について論じる中で、「友人関係は発達

しつつある自我の働きによってリビドー的攻撃欲動を解消すると同時に、友人関係における地位はしばしば精神的な健康状態の鋭敏なバロメータとなる」と述べ、Tesch, S. A. (1983) はそれを受けて様々な友人関係の研究を概観している。彼が取り上げているのは友人関係と人格要因の研究 (Maas; 1968), 友人関係と行動障害の研究 (Roff, M.; 1961), 友人関係と幸福, 社会的知性との関連等の研究である。中でも Maas, H. S. は先述の諸研究者が行った指摘を調査によって検討し、前思春期の親密さ (intimacy) が、その後の人格要因 (特に「暖かさ」や「よそよそしさ」等) と関連していることを見出している。また Roff, M. は、やや年代が上がるが、思春期の友人関係に問題のあるものは、大人になっても適応に困難を示すことをやはり調査によって裏付けている。同様に、仲間によって受け入れられていない子供が学校から脱落 (dropout) しやすいたことが Ullman, C. A. (1957) によって指摘されている。

これら一連の研究は、いじめには限定されていないが、少年期の仲間関係が後々の人格発達に大きな影響を及ぼすことを実証的に示唆していると考えられる。

ところでこのように少年期において重要な仲間関係、友人関係は、一体それまでの親子関係とどのように結び付いているのだろうか。Hartup, W. (1979) によれば、上記のように家族関係を仲間関係に先行するもの、と捉える研究者は確かに多いが、相互の依存関係については殆ど分析されていないようである。彼自身はこの点について次の二つの考え方を提示している。

①一元過程モデル…母子の愛着システムが安定していると、仲間との相互交渉に効果的な状態が作られる。

②二元過程モデル…母子関係を通しての社会化は特定の社会的技術 (例えば異性を愛したり、育児をすること等) を身に付けるのに役立つ、仲間システムは同輩集団との相互交渉に役立つ。Youniss, J. (1980) はこれを受けて、子供と両親の関係は秩序と権威の感覚を養うものであるとし、子供どうしの関係は感受性、自己理解、相互協力の能力等を養うものであるとして、もっぱら二元過程モデルを支持する研究を行っている。

ところで先述のように、臨床心理学の分野ではもっぱら一元過程モデルが暗黙のうちに仮定されているように思われる。確かに集団不適応や情緒障害等の訴えを持って相談室を訪れる子供達に接していると、基盤となるべき家族の問題 (特定の家族成員が抱える問題に限らず、相互の関係の問題も含めて) がクローズアップされてくる場合が多いことは事実である。しかしながら後述するように、いじめられっ子への対応は必ずしも家族や個人の精神内界へのアプローチのみで解決され得るものではないように思われる。というのも、いじめられっ子と一口に言っても様々なタイプがあり、確かにそのようなアプローチが効を奏する場合も多いが、決してそれが唯一の方法であるとは考え難いからである。

<いじめの定義>

先にも述べたように、いじめは非常に曖昧な言葉であるにもかかわらず、大方の文献では、あたかもこの「いじめ」という一語でコンセンサスが得られているかのような書き方がされている。いじめは、その形態、期間、影響等によって多義的に捉えられざるを得ない側面を持っており、操作的定義を免れ得ない。しかし調査研究が進められ、一定の資料が蓄積された現段階で、改めて定義付けを試みても無駄ではなからう。江川 (1986) は、「いじめとは、同一集団内の

成員間に生ずる、意図的かつ一方的な攻撃的行動であり、心理的・身体的・物理的に、その相手に苦痛を与えたり、害を与えたりする行動である」としている。ここでは「快感を味わう」、「動機・理由の特定性」、「継続性」、「加害の程度の限定性」等、従来指摘されていた側面を敢えて無視している。一方高野（1986）は、これを定義して「圧倒的に強い立場にある者（あるいは集団）が、反撃の余地を持たない弱い立場にある者（あるいは集団）に対して、ことばや態度や比較的軽度の身体的攻撃によって、主に心理的な苦痛を与える行為」としている。

前者の定義は、確かにこれまで報告された多様ないじめの多くを包含するものではあるが、若干誤解を招く部分があるように思われる。まず「同一集団内の成員間」とされているが、これはいじめが他者を排斥するという機能を持つ以上、単純に「同一集団内」とは言えないように思われる。松本（1986）が指摘するように、いじめは「親一疎のどちらでもない『中間的』な関係の中で生じやすい対人関係のトラブル」であり、いじめられる者は厳密な意味で集団内部に属しているとは言い難いからである。社会心理学的に言うと、これは集団システムの境界設定のダイナミズムで説明される。すなわち「集団には通常自他を分ける境界が設定されているが、内部の均衡が脅かされるとまず妨害的要素の内部処理が試みられ、それが成功しない場合にはその要素を集団外に排除して境界の再設定が行われる」（広田；1978）のであり、いじめはこの「内部処理」から「排除」までのプロセスを含むものになる。従ってこのような集団の辺縁に起こる現象としての認識のもとで、この「同一集団内」という言葉を理解していく必要がある。

また前者の定義の中で、「継続性」が除外されていることも若干疑問が残る。多くの文献や報告でいじめられっ子が特に訴えているのは、その執拗さであり、一過性のそれではない。よしんば一度きりの非常に外傷的（traumatic）ないじめ体験を持ったとしても、それが後の人格発達に影響を及ぼす程度は、より早期の外傷の出来事とは大きく異なるのではないだろうか。少年期には既にある程度の防衛機制や認知能力が十全に働いていると仮定されるし、そういった出来事を心理的に処理する能力もかなりの程度確立されていると考えられるからである（ただし、何らかの心理学的問題を抱えたいじめられっ子の場合、このように断定できない事もあり得る。この点については後述したい）。

さらに「心理的・身体的・物理的」な攻撃であるという点についても一言付け加えておきたい。いじめは、いじめられる側にとっての影響がもっとも重視されるべきであり、例えばクラブの新入生いじめや転校生へのいじめは、一種の通過儀礼としてやられる側も受け入れている場合がある。多くの報告の中には、いじめを拡大解釈し過ぎることで、いたずらにこれを流行現象にしてしまっているものも、ないとはいえない。ここでは後者により明確に述べられている、「主に心理的な苦痛を与える行為」を重視したい。

以上のことから、ここではいじめを「特に少年期に多発する、ある一定の集団によってなされる、意図的、一方的で、ある程度持続的な攻撃的行動であり、被攻撃者に対して主に心理的な苦痛を与え、後の人格発達に大きな影響を及ぼすもの」と、とりあえず定義したい。また、現代のいじめが特に特定個人に向けられ、いじめっ子（bully）がはっきりしない、とする多くの報告に従い、ここで併せて「いじめられっ子」を定義しておきたい。これは、「前述の『被攻撃者』に相当し、いじめへの対応が何らかの理由で持てないもの」と言えよう。このいじめられっ子については後に詳しく述べることにする。

＜いじめの現状について＞

いじめの形態については、これまでの多くの調査研究がかなり一致した結果を報告している。中でも大規模な調査としては、深谷（1984）の小学4～6年生2100名を対象にした調査報告、同じく深谷（1985）の中学生約1700名を対象にした調査報告、鈎（1984）の小学4年、6年、中学2年の計3451名に及ぶ調査報告、1986年の文部省の調査報告等があげられるが、これらにおいてほぼ一致しているのは、「仲間外れ・無視」、「脅し」、「からかい」、「暴力」等のいじめ方法である。また年代的に見たとき、「仲間外れ・無視」等の集団いじめが小学校6年、中学校1年あたりをピークに増加していること、特に中学校、高校になると「暴力」や「脅し」等、非行的色彩が強くなること、そして全体を通して男女差が次第に顕著になることが指摘されている。特に女子においては、集団的で間接的な方法がとられるようになる。この点について、例えば男子よりは女子のほうが、より親密な友人関係を作る（Douvan, E. & Adelson, J.; 1966）、またより小さな集団の友人関係を作る（Savin-Williams, R. C.; 1980）といったこれまでの研究、そして攻撃性の表出に関して Feshbach, N. D. (1969) が見出した結果（女子のほうが、拒否、排斥といった間接的な攻撃性表出をする）等との関連が考えられる。

いじめの動機については逆に、殆ど一致した見解が得られていない。深谷（1986）も指摘しているように、「ありとあらゆる行動が『いじめ』の対象にされている」のである。これは、まずいじめのターゲットが存在する、あるいは集団の緊張が高まっている状態が存在するのであり、理由はいじめを正当化するための二次的産物であることによるのではないだろうか。筆者が行った調査（1985）でも同じような結果が得られており、顕著な例として、いじめる時には「まず理由を探す」といった解答が幾つかあったことを付け加えておきたい。

次にいじめを見たときの対応についてであるが、これも多く一致して年齢増加と共に傍観者の態度をとるものが増えている。この傍観者集団をいじめの元凶と見る立場もあるが、他方でこれを社会心理学的な立場から説明しようとする試みもある（高木；1986）。森田（1986）はさらに社会学的な立場から、「いじめの四層構造論」という論を展開しており、その中で「被害者」、「加害者」、「観衆」、「傍観者」のそれぞれが相互に絡みあっていじめが生起するとしている。また、ここで特に注目されるのはいじめに関する日米学生調査の比較結果である。すなわち「いじめを見たらどうするかの問題に対して日本の中学生では止めに入るのが二割ほどに留まるのに対して、アメリカではその数が四割にも達する」（佐藤；1960）のである。ここから「『勇気を持って、勇敢であれ』と教えるような教育が、幼いうちからもっと行われてよいのでは」（深谷；1986）と結論することもできるし、あるいは「場の倫理」（河合；1976）に忠実であることが日本における「社会性の獲得」につながるものであり、後述するようにいじめられっ子はそういった能力が欠けている、とも言いうるかも知れない（現に筆者の調査では、いじめの理由として「場をわきまえないから」といった解答が幾つか見られた）。

いじめられた時の相談相手も概して結果は一致しており、友人が年齢と共に増加している。特徴的なことは、ここでも幾分性差が見られることであり、中学生では男子より女子のほうが友人を選択する率が高く80～90%に及ぶのに対して、男子は誰にも打ち明けないものが年齢と共に漸増傾向にある。筆者が行った調査でも同様の結果が出ており、友人関係が自尊心を高める、とする先述の Sullivan や、chum の無い男子は自己価値観が低い、とする Mannarino, A. P. (1978)

の報告との関連で興味深い。特に男子の場合、いじめられて他人に相談することはそれ自体、ある程度の自尊心の傷つきを覚悟せねばならないのであり、この結果はそれを避けようとする気持ちの表れでもあろう。

さて昨今のいじめの現状について最後に二つだけ付け加えておきたい。一つはこのいじめ現象が日本に独自のものなのか、あるいは諸外国にも共通して見られるものなのか、ということである。深谷（1986）は、「現在日本で広がっている『いじめ』はやはり日本の子供社会に固有の問題なのであろう」としている。先述の日米学生調査の結果でも、「アメリカのいじめはけんかの意味合いが強い」としており、またカニングハム（1986）も独自のアメリカ居住体験から、確かに日本のいじめに相当するものもあるが、bully は既に死語と化しており、もっぱら犯罪的な暴力が中心になっている、としている。しかしながら、後述するようにアメリカでも Asher, S. R. (1981) を中心にした研究が進められており、他にも教育現場での取り組みとして Allan, J. (1981) や Lilly, M. S. (1971) がいわゆるスケープゴートの問題として、いじめを取り上げている。さらに Bergman, T. (1982) によれば、ドイツでもいじめによる自殺の事例があった、と報告されている。ただ、いずれの場合も日本ほど深刻な問題としては扱っておらず、自殺、障害殺人を大量に生みだした我が国のいじめとは、やはり別であると考えざるを得ないであろう。

今一つ付け加えておきたいのは、1987年度の文部省の調査でいじめが激減し、代わって登校拒否が増加した、と報告されていることである。かつて筆者は戦後の教育問題の変遷を児童・生徒のストレスとの関連からコメントしたことがあったが（高石；1986）（同様のことが須永；1986によっても論じられている）、場当たりの対応が続く限り問題はさらに激化した形で展開するのみに終わってしまうのではないだろうか。

<いじめ生起について>

上でも若干触れたように、いじめが何故起こるかについて従来多くの仮説が提出されてきた。以下にその前史も含めて概観してみたい。

井上と春日（1971）はソシオメトリーを用いた田中（1964）の研究を取り上げ、反発がことに一部の成員に集中する傾向を認め、それが小学校の学級集団でもっとも顕著である、とする報告に注目している。また春日（1964）は、学級集団が競争的な状況になり、一般成員が高い成績を維持しようとする結果、一部の学級成員に無力感を持たせたり、排他的にさせたりする事実があることに注目すべきである、としている。さらに鈴木（1979）は積極的に拒否される児童の特徴として、「喧嘩好き」、「威張る」、「人の注意を引こうとする」、「おしゃべり」、「騒々しい」等をあげ、田代と田中（1981）は集団規模が大きくなるほど孤立児も増えることを、特に高学年において見出している。これらの研究は主に孤立児の研究という形でなされており、概して教育心理学、社会心理学、あるいは広く社会学の分野で行われていた。

いじめが直接扱われるようになったのは、1979年のいじめられっ子の自殺事件以来である。まず稲村（1980）は現代のいじめが全般に陰湿、屈折を強めている、として、いじめられっ子といじめっ子の分類を試みている。斎藤（1980）は弱い者いじめは普遍的に存在するものであるとし、加えて日本特有の「人並み」指向がそれと相乗作用を起こしていじめが生起する、と捉えている。氏原（1980）は、現代の親子は共に平等幻想によって支配されているとし、その崩壊による攻撃

性がいじめを生む、としている。また鈴木（1980）は児童のストレスにいじめの原因を求め、菊池（1980）は社会学的観点から、小党派集団（いじめ集団）による多数派集団の先導という形でこのいじめ現象を捉えている。こういった初期のいじめ現象についての仮説は調査研究の増加や事例の蓄積によって裏打ちされ、もっぱら社会学、社会心理学の領域で展開した。またその逆の場合もある。例えば保坂（1984）が提起した「いじめの三段階」（からかう→排除する→暴力）は、当初子供達からの手紙をもとに考え出されたものだが、先述の高木等によって集団の排除過程と逸脱者への攻撃の観点から考察され得るものとなった。

一方稲村に始まるいじめっ子、いじめられっ子の性格分類は、山中（1981）、田畑（1971）、詫摩（1984）、江森（1984）等も行っており、次のようなほぼ一致した見解が得られている。すなわちいじめっ子は、我がままで、家庭的に満たされない部分を持っており、寛容度あるいは愛他心の乏しい側面を持っていること、他方いじめられっ子は後述するように幾つかのタイプに分類され得るとしているのである。しかしながら、この点については両者が入れ替わり得るとの報告もあり（遠藤；1984、森田1986等）、またいじめが集団化しているという現状認識から、もっぱらいじめられっ子に研究の焦点が絞られてきている。そこで次に、いじめられっ子について検討していきたい。

<いじめられっ子とその対応について>

これまで述べてきた様々な観点から、いじめ現象の理解に関しては一応の成果が認められよう。しかしながら何故特定のいじめられっ子にいじめが集中するのか、という問題は未だ明らかにされてはいない。特に深谷（1986）が指摘しているいじめられっ子の固定性は、重要な課題を孕んでいると考えられる。彼は「中学生になってのいじめられ体験の所有者は過去にも6割がその体験を持っている」事実を指摘し、さらに「中学に入ってまだ『いじめ』に逢っていない子で小学生時代にいじめられたことのある子は、わずか2割5分に過ぎない」と述べている。ここからいじめられっ子自身の抱える問題が改めて問われることになる。先述の詫摩はいじめられやすい子供として①目立たない大人しい子供、②我がままな子供、③容貌、体型に特徴のある子供、④転校してきた子供をあげている。また江川は斎藤（1986）を引用して、①身体的なハンディキャップがあること、②成績や性格に問題があること、③身なりがだらしないこと等を指摘している。しかしながらこういった分類は確かに異なる対応を示唆するよすがにはなるが、反面いじめを合理化する危険すら孕んでいると言えよう。筆者としてはむしろ対応を考慮した、より臨床心理学的な見地から、この問題を捉えてみたい。従来の研究からは、大別して以下の三つの考え方がありとえられる。①Asher が述べるように、social skill の未熟なもの、②山中等が指摘するように、他者のコンプレックスを刺激し、攻撃性を誘発するもの、③水島（1979）の述べるように母子関係の依存が断ち切られることについて不安を持つもの、等である。

このうち①は比較的軽度のいじめられっ子と考えられる。Asher はいじめられっ子に対して、学校カウンセラーや教師が個別に、仲間の作り方や友人との付き合い方を話し合っていくことで、かなりの数の子供達がクラスに受け入れられていったとしている（Oden, S. & Asher, S. R.; 1977では一年後のフォローアップでも効果は持続していた、と報告しており、確かに有効な方法であろう）。

②と③の区別は臨床心理学的に言うと、性格障害と神経症の区別に類似している。すなわち②では、過去の剝奪 (deprivation) 体験や心的外傷体験の上に歪んだ対人関係が形成され、固定化したもの、と考えられるのに対し、③はもっぱら幼児期の対人関係を強化、反復し、新たな対人関係を結べないもの、と考えられるのである。これらはいずれも専門的な治療を必要とし、また後々の人格に障害を持ち越す可能性の高い、重症のいじめられっ子と言えよう。佐藤 (1986) の述べている、「被虐的性格を身に付けた子供」等は、②の典型例と言えるだろうし、登校拒否に至るいじめられっ子の何割かは③に含まれるものが多いように思われる。

このような特に②、③のいじめられっ子達に対し、我々カウンセラーは確かにこれまでの知見に基づいたアプローチをしていくのであるが、最後に一言付け加えておきたい。先述の Sullivan が、分裂病の病棟に前青春期的雰囲気を作り上げることが治療に良い効果をあげるとほめかしているように、この少年期はそれ自身独自の機能を持ち、先行する家族関係やあるいはそこから形成された個人の人格の障害に対して、何らかの修復力を持っているのではないか、ということである。このいじめられっ子の治療を通して、我々はこれまでとは異なる二元過程モデルに沿った、新たな臨床心理学的視点を見出していくことができるのではないだろうか。

引用文献

- Allan, J. 1981 Resolution of scapegoating through classroom discussion. *Elementary School Guidance and Counselling*. 16, 121-132.
- Asher, S. R. (ed.) 1981 *The development of children's friendships*. N. Y. Cambridge University Press.
- Bergman, T. 1982 Bjerner, T (訳) 1983 「なぜ僕だけをいじめるの？」偕成社.
- Berndt, T. J. 1982 The features and effects of 'friendships in early adolescence. *Child Development*. 53, 1447-1460.
- Blos, P. 1962 野沢栄司 (訳) 1971 「青年期の精神医学」誠信書房
- 江川 成 1986 「いじめから学ぶ」大日本図書
- 江森陽弘 1984 「いじめっ子いじめられっ子」グロビュー社
- 遠藤豊吉 1984 「弱いものいじめ」日本放送出版協会
- Erikson, E. 1959 小此木啓吾 (訳) 「自我同一性」1973 誠信書房
- Feshbach, N. D. 1969 Sex differences in children's modes of aggressive responses toward outsiders. *Merrill-Palmer Quarterly*. 15, 249-258.
- Hartup, W. W. 1979 依田 明・清水弘司 (訳) 1981 幼児期の社会的世界「現代児童心理学4」金子書房
- 広田君美 1963 「集団の心理学」誠信書房
- 保坂展人 1984 「学校に行きたくない」集英社
- 井上健治・春日 喬 1971 学級集団におけるコンフリクト *年報社会心理学* 12 92-105.
- カニングハム・久子 1986 犯罪化するアメリカの「いじめ」28-35 363 少年補導
- 河合隼雄 1976 「母性社会日本の病理」中央公論社
- La Gaipa, J. J. 1979 A developmental study of meaning of friendship in adolescence. *Journal of Adolescence*. 2, 201-203.
- Laplanche, J. & Pontalis, J.-B. 1976 村上仁 (監訳) 1977 「精神分析用語辞典」みすず
- Lilly, M. S. 1971 Improving social acceptance of low sociometric status, low achieving students. *Exceptional Children*. 37, 341-347.
- Maas, H. S. 1968 Preadolescent peer relation adult intimacy. *Psychiatry*. 31, 161-172.
- 鈎 治雄 1985 「いじめっ子、いじめられっ子」第三文明社
- Mannarino, A. P. 1978 Friendship patterns and self-concept development in preadolescent males. *The Journal of Genetic Psychology*. 133, 105-110.

京都大学教育学部紀要 XXXIV

- 水島恵一 1979 社会的発達の病理「児童心理学講座 7」金子書房
中井久夫 1986 サリヴァンを読む4 精神科治療学 1(4) 671-679.
Oden, S. & Asher, S. R. 1977 Coaching children in social skills for friendship making. *Child Development*. 48, 495-506.
Rangell, L. 1963 On Friendship. *Journal of American Psychoanalytic Association*. 11, 3-54.
Roff, M. 1961 Childhood social interactions and young adult bad conduct. *Journal of Abnormal and Social Psychology*. 63, 333-337.
Sullivan, H. S. 1940 中井久夫・山口 隆 (訳) 1976「現代精神医学の概念」みすず
Sullivan, H. S. 1953 *The interpersonal theory of psychiatry*. N. Y. Norton.
鈴木正義 1979 交友関係の発達「児童心理学講座 7」金子書房
田畑 治 1981 いじめっ子にみられる親子関係 教育心理 29 112-115.
高野清純 1986 「いじめのメカニズム」教育出版
高石浩一 1984 いじめられっ子の対人パターン 京都大学修士論文
高石浩一 1986 いじめの過去, 現在, そして未来 創造的市民 13 12-13
詫摩武俊 1984 「こんな子がいじめる, こんな子がいじめられる」山手書房
田代光一・田中克昌 1981 集団規模の大きさから見る孤立児童の特徴 日本教育心理学会第23回総会発表論文集 14-15
Tesch, S. A. 1983 Review of friendship development across the life span. *Human Development*. 26, s/o, 266-276.
Ullman, C. A. 1957 Teachers, peers and tests as predictors of adjustment. *The Journal of Educational Psychology*. 48, 257-267.
山中康裕 1978 「少年期の心」中公新書
山中康裕 1980 いじめられっ子 *Voice* (5) 116-121
山中康裕・森 省二 1980 少年期の精神病理「現代のエスプリ」157 5-18
Youniss, J. 1980 *Parents and peers in social development*. Chicago. University of Chicago Press.
稲村, 菊池, 鈴木, 氏原, 斎藤 (いずれも1980) は, 月刊生徒指導一月号所収
深谷, 松本, 小林, 佐藤, 高木, 森田 (いずれも1986) は, いじめ「現代のエスプリ」288 所収
Douvan, E. & Adelson, J. 1966 及び Savin-William, R. C. 1980 は Berndt, T. J. 1982 所収
(この他, 1980年以降のいじめに関する資料・文献は土井隆義 (1986) 「いじめ」問題をめぐる出版状況 少年補導 363 に詳しい。)

(博士後期課程)